時々、あの人と、同じ電車の同じ車両になることがあった。
たまたま僕が乗った各駅停車の宇治行きに、
あの人が乗ってくることもあった。

偶然、伏見桃山駅で、僕の宇治行きに、乗り込んで来て、
次ぎの駅の中書島で、降りて行くあの人の姿を見る事がある。

視線が合っても、僕は、無言で、目で追うだけだった。
あの人が、僕の前に立ったり、近くに来ても、
結局、僕は視線をあの人に向ける以外、
何もできないし、それ以上は何も起こらなかった。

六月に入っても、まったく、
僕は積極的に行動できなかった。

そんなある朝、三条京阪、南口での事だった。

いつもの様に、急行から降りて、
僕は南口の改札口へ急いだ。
すると、あの人が、親しそうに、
別の高校の、背の高そうな男子生徒と、
二人向かい合い、笑いながら話していた。
足が一瞬、動かなくなり、前へ進まなかった。

いつも、帰りに待ち合わせする女友達が
横にいて、二人っきりではなかったが、
しかし、それでも、僕は、それを目撃し、
ショックだった。

103 これでいいのかも知れない・・・・・・・・・・452

萩原良昭